



○「二十四の瞳」

金比羅宮の石段（四国研修旅行にて）→

壺井栄の『二十四の瞳』。小説を読んだり、映画やドラマで観たりしていなくても、多くの人がなんとなくあらすじを知っている小説の一つではないでしょうか。

小学生の頃に松江の本屋さんで『二十四の瞳』を買ってもらい、何度も読んだ事を覚えています。教員を志したのはこの頃だったかもしれません。

ある教育雑誌で「離島・へき地教育には、特別支援教育、人権教育、生徒指導、複式教育などに共通する大事な教育理念がすべて詰まっている」というコラムを読んだことがあります。

1952年（昭和27年）に刊行された『二十四の瞳』の舞台は、小説では「瀬戸内海べりの一寒村」となっているものの、2年後に木下恵介監督によって映画化された時に小豆島が舞台設定されたことで、今では小豆島に映画村まであり、食堂では昭和の懐かしい給食セットも食べられるそうです。かれこれ20年くらい前に、岬の分教場や映画村に訪れたことがあります。小学校の頃に初めて読んだ時、20年前に教員になってから映画村を訪れた時、そして今あらためて映画を観て小説を読み返した時、抱く感情や思いは違っている気がします。

1928年（昭和3年）から終戦の翌年までを描いたこの小説は、主人公の大石先生が本校の小学校から離れている岬の分教場に赴任し、12人の新入生とともに先生として育っていく物語です。やがて、軍国主義が色濃くなり、不況も厳しくなって、登校を続けられない子どもも出てきます。6年生になると秋には修学旅行が行われるのですが、小説では「（時代設定としては、犬養毅首相が海軍の青年将校の凶弾に倒れ政党政治が終わりを告げる5.15事件の翌年）…時節がらいつもの（宿泊ありの）伊勢まいりをとりやめて、近くの金比羅ということにきまった。それでもいけない生徒がだいぶいた。働きにくらべて儉約な田舎のことである。宿屋にはとまらず、（早朝出発の日帰り旅行として）三食分の弁当をもってゆくということによって父兄のさんせいを得た…こんびらは多度津（港）から一番の汽車で朝まいりをした。…石段をのぼっていきながら汗を流しているものもある。…」と描かれています。

コロナ禍にあって、この3年間台湾研修旅行は中止。昨年度本校は石見地方日帰り2日間、今年度は金比羅宮参拝を含む四国研修旅行でした。状況はまったく違うものの、どんな形であれ修学旅行の実施が、多くの生徒にとっていかに大事で、保護者や学校もその思いを大事したいかは変わらないとあらためて感じました。特別支援学校での教頭時代、1、2人の生徒のための修学旅行を引率しました。生徒も、先生も半年以上も前から長い時間をかけ、事前学習を含め入念に準備してきたからか、帰りの出迎えは成就感もあって感動的でした。

小説の最後は、終戦後に同窓会が開かれるシーンで終わります。戦争や病気で半数近くが帰らぬ人となった中で行われた同窓会では、修学旅行の思い出も語られたでしょう。中でも、戦争で全盲になった通称ソankyに、「（何を言われても）平気のへいぎでおられるようになれえよ」とマスノが言うシーンは考えさせられました。この時代は、障がいがある人自身が障がいに立ち向かっていかないといけない時代だったことがうかがえます。

採用になってはじめて赴任したのが隠岐の島にある隠岐水産高校。最初で最後、3年間卒業まで同じ生徒を担当し卒業させました。卒業生は21名。四十二の瞳です。『二十四の瞳』を読み、一番思うことは、教育や学びがいかに大事か、その後の人生に影響を与えるかということです。楽しい思い出が語れる同窓会ができる平和な日々が続くことを願って止みません。

